

戦争と地図・情報

——戦後50年によせて——

筆者は11期。

財団法人 日本地図センター発行

「地図ニュース」1995-8 No-275 より

ながおか まさとし
長岡 正利

今年の元旦、各紙は多かれ少なかれ、戦後50年について述べた。大東亜戦争が完膚なき敗戦に終わって以来、戦争に突入するまでの思想や政治の流れを振り返ってみれば、自壊した政党政治とその後続く翼賛体制のもとで戦われたのは、対日経済封鎖網の圧迫打破等の意図があったにしろ、アジア地域への侵略的行為であったに違いない。

戦争に地図等は不可欠なものとして、当然に各国ともこれらを含む情報戦には力を注いだか、わが国のそれは侵略の先兵であったのか。不戦決議の問題を引くまでもなく、大変に重い命題である。

本誌でも、この戦後50年の8月にあたって特集を組むことになった。筆者の担当が戦中、次の清水靖夫氏が戦後の復興期における地図事情。最後の西尾元充氏が、戦中から現代までの、写真偵察から衛星リモートセンシングに続く時代を生きられた貴重な経験を述べられる。

地図の全盛期

第一次大戦後の戦争景気から昭和初期にかけての一時期、大正デモクラシーの風潮のなかで、「大衆文化」の発展とともに、観光旅行や登山が大衆のものとなり、地図への需要も一気に高まった。民間での地図出版もおいおい盛んとなり、陸地測量部の5万分1地形図は大正13(1924)年までに、一部離島を除く全国が作成されて、戦前における地図の全盛期を迎えた。当時、1万分1から250万分1までの各種縮尺の地図に加えて、特殊図と言われる都市近郊図(集成図)、山岳図、スキー用図のほか、演習場図、各種

の図式、成果表等まで広く一般に販売された。特殊図には、当時の開けゆく時代の雰囲気を感じさせるものがあり、なかでも、御大禮記念の京都近郊図のように、左近の桜右近の橘に頌歌の声聞くような典雅な表紙絵(本誌218号参照)のものなど、一時の夢まぼろしであった。

描き変えられ始めた地図

しかし、大恐慌が暗い時代の幕開けを告げ、都市部での不況・失業増加と農村の疲弊がつづく中、昭和11(1936)年の二二六事件、翌年の盧溝橋事件に発する日中全面戦争(支那事変)下での統制経済と「貧乏は敵だ」とする風潮、国家総動員体制と、いつ果てるとも知れぬ戦争のなかでは、観光などは思いもよらぬこととなり、地図もまた秘密の壁に包まれ始めた。

これに先立つ以前から、要塞地帯については地図は一般には発行されていなかったが、さらに12年改正の軍機保護法によって、「陸軍大臣又ハ海軍大臣ハ防空其ノ他國土防衛ノ為軍事上ノ秘密保護ノ必要アルトキハ區域ヲ定メテ」飛行、高所より

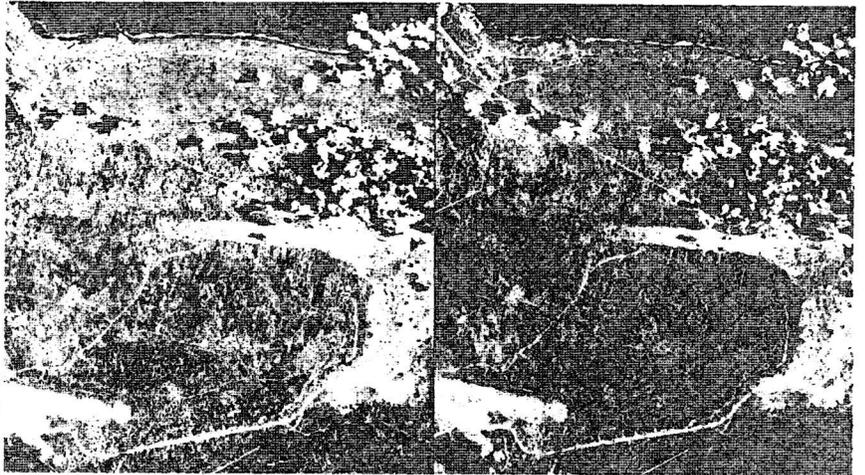


図1 米軍上陸前の、爆煙あがる硫黄島南東海岸(疑似実体視可能)。一帯には整備陣地が造られていたはずで、全面に無数に見える黒点(穴)は爆弾炸裂跡。当時の在島日本軍等2万人余は、20年3月に玉砕。米軍撮影(恐らく2月)、米国立公文書館(National Archives and Records Administration, Washington D.C.)より入手。



図2 地形図の隠蔽白ヌキ部分の拡大と改描、1万分1地形図「日本橋」、陸地測量部、左より、明42測・同43発行、大5修・同6発行、昭12修・同16発行、当初の図に比べて皇居全域が白ヌキとなり、さらに近衛師団等の軍施設が空閑地として表現される。70%に縮小。

の撮影、測量等を禁止又は制限できることとなったほか、北方地域や島嶼・海峡部、要塞地帯については地図等の図書物件が公けにできなくなった。これを受けて、一部地域については、軍関係と重要施設をすべて除いたうえに山地もぼかした「交通図」(図3)が発行された。この頃には、民間製の地図においても、「〇〇要塞司令官御検閲済」とするなど、自主規制が始まった。

また、この措置後にも発行できた地域の地図で

は、皇室関係地区についての従前からの白ヌキに加えて、陸海軍関係の総てのほか、飛行場、造船所等が「国土防衛上ノ地図改描ニ伴ヒ削除」され、工場、発電所、電力線、高層建築物等も「所要ニ應ジ削除」された。これらの戦時改描版は、一瞥しても何かあるなど判るような、おぞましい地図(図2)として今日に残されている。さらに、16年以降は、200万分1以下の小縮尺図を除いて地図の自由な販売が逐次停止された(同年10月15日・

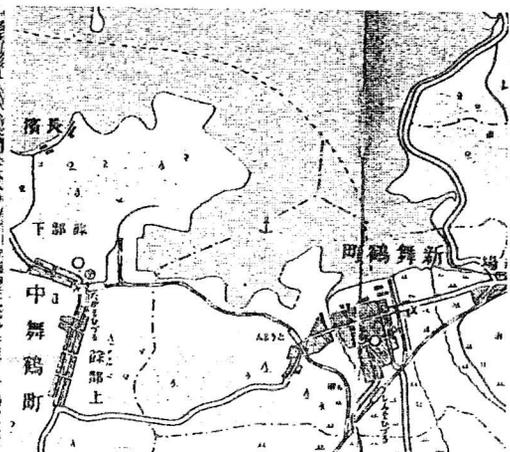
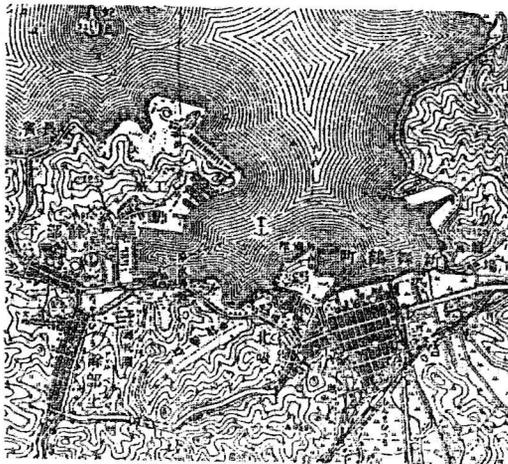


図3 舞鶴軍港周辺の交通図、左は5万分1地形図「舞鶴」(陸地測量部、明26測・昭2鉄補・秘図)、右は同交通図「舞鶴」(昭11製版・発行)、いかにもものどかな港町に見えるが、それにしては鉄道支線が多いのが不自然。ともに90%に縮小。

翌年8月28日付け官報ほか)。

つまるところ、かつては一般に販売していた地図に次々に策を弄して、国民に不自由を強いる結果となった。一方の米軍では、入手済の日本の地形図を利用したが、19年にB29爆撃機が日本上空を自由に飛行できる(高射砲と迎撃機の到達高度以上)ようになって以降は、情報入手に何の問題もなくなった。米軍による地図作成が本格化するのには、戦後であるが、図4にその一例を示す。

図1は、戦地での空中写真の一例である。

国外国内の惨、情報非活用と情報断絶の悲劇

昭和に入って、地図作成の主力はいわゆる外邦地域と戦地に向けられ、膨大な数の外邦図が作られた。しかし、これらの地図は、「軍事極秘」扱いとされて、本来の意図とは裏腹に作成そのものが目的化してしまい、余り使われはしなかったようである⁹⁾。

一例をあげれば、上陸した3万人余の2/3が還らぬ人となったガダルカナル島の、「海図により(陸上山岳地帯の)迂回路を研究するに…比較的容易に且つ敵飛行場の直前に進出」し得るとして、奇襲のために地形錯雑峻険な人跡未踏の熱帯密林に踏み込んだ例。日本軍による偵察空中写真が現地司令部に届いていたにもかかわらずである⁹⁾。あるいは、ニューギニア島の標高4000mに達する密林を補給もなく徒歩で越えようとして惨憺たる結末となったポートモレスビー作戦や、ヒマラヤに連なる重畳たる山岳地帯と大河を超えてアッサムへ

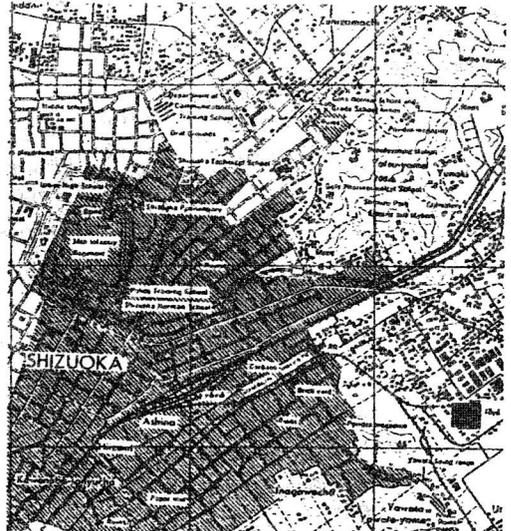


図4 米軍地形図に見るRuinsの表現。1:25000 "SHIZUOKA NE" (AMS, 1951)、Ruinsの表示部が空襲焼滅域。桃色部が残存市街地、70%に縮小。

の進攻を目指し、雨季入り後の退却路は白骨街道とまで言われたインパール作戦など、ともに地形図があったにもかかわらず⁹⁾、これを活用するすべがあれば、地形的至難さのゆえにこの種の作戦企画は思いもよらぬことではと、今にして思われる。科学的戦略の思考欠除に起因する悲劇の例は、枚挙にいとまがない。

柔軟性に欠く命令至上主義とともに、地図作成のみが目的化してしまっていた悲劇を、南方での野戦測量の思い出の記から引用すると、「…たった1人で測板を担いで、…木もない草原の丘で、頭

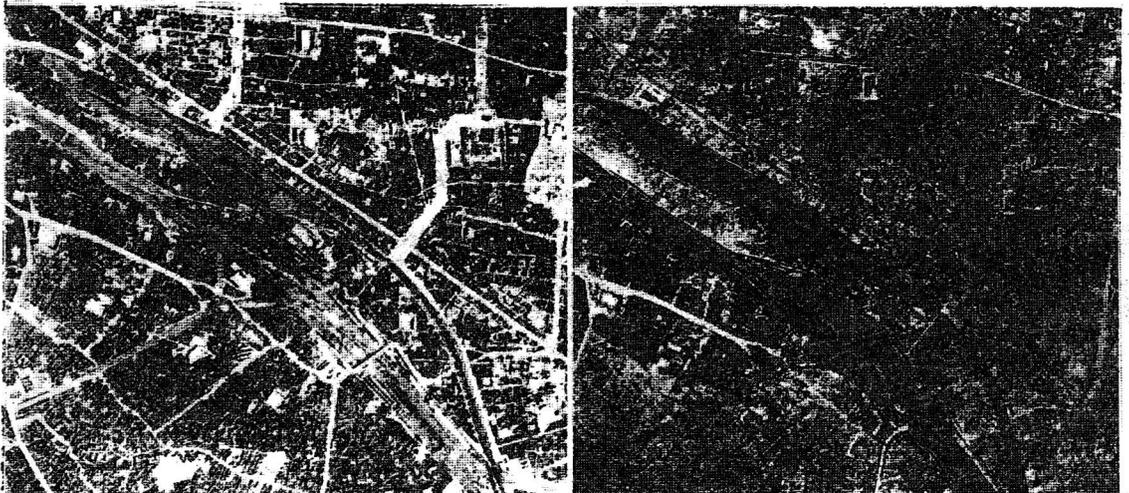


図5 米軍写真に見る東京空襲の状況、写真中央が千代田。左は、下町中心の3月10日空襲後だが、この辺りでは写真右に僅かに焼け跡が達しているのみ、帯状の空地は防火のための強制疎開跡。右は5月25日空襲後で、この付近はほぼ焼滅(暗色部が残存市街地)。米軍撮影(4月2日と5月28日)、米国国立公文書館より入手。紙上での縮尺約2.3万分1。

と測板上をホサで隠して銃撃から逃れ、敵機が去るとまた測量を続行し、…敵が目前にきているというのに何のために測量作業をするのか、…阿呆のように測板を担いでウロウロしていたのですから、命懸けの笑えない悲劇です。」

ふりかえって、国内では、昭和19年夏のサイパン島失陥の前から空襲が本格化した。翌年3月10日の東京大空襲（死者約10万人）以降は、それまでの軍関連施設への高高度精密爆撃に代って、都市への夜間の無差別焼夷弾絨毯爆撃となった。空襲は繰返され、5月25日にはそれまで被害を受けていなかった残存地区に対するとどめともいえる夜間大空襲で、東京の主要部はほぼ壊滅した。広島・長崎の原爆は言わずもがな。ほかに、各地の小都市に至るまで、8月15日の払暁に至るまで、嵐潰しともいえる空襲が繰返された。図5に東京の状況を示す。なお、日中戦争（支那事変）中に、日本軍による重慶への無差別爆撃等によって、甚大な被害があったりすることも忘れてはならない。

戦争は、国家総力戦としての長期展望もないままに、欧州戦線でのドイツの必勝を信じ、空虚な理念と無責任な美辞麗句をかざしつつ、国力を無視して対米英戦に突入する形となったが、そのことは政・戦略情報収集の欠如と悲惨な帰結を暗示するものであった。国家としての情報機関はなく、そのための人材養成も考慮されず、国策や重要な作戦のための情勢判断では概ね時期を逸しつづけ

た。要するに、この戦争は、情報を軽視した日本が、「敵を知らず己れを知らず」して突入したもので、その帰趨は初めから明らかであった。そのことは、ここで述べてきた戦中の地図等に関する事情の一端からも伺い得る。

廃虚からの復興に向けて

連合国軍による日本占領の後、米軍により全国土の空中写真撮影（4万分1、平野部は1万分1）が進められた。撮影は、戦中の戦略爆撃の頃から、偵察および爆撃効果評価のため繰返されていたが、これらは米国国立公文書館に保管されている。戦後分は、撮影コースが太平洋から日本海まで抜けるような、今日でも実施し得ない規模で行われ、戦災復興用等として日本に供与されて、今日まで、国土の大規模改変前の状況を知る貴重な資料として活用されている。なお、わが国による撮影としては、戦前の昭和10年代の陸軍によるものが断片的に残されている。図6はそれらの対比である。

【参考文献】

- 1) 朝日新聞社編(1983)：「日本大空襲」、201p.、原書房。
- 2) 杉田一夫(1988)：「情報なき戦争指導」、412p.、原書房。
- 3) 清水靖夫ほかの諸論文(1988)：地図情報、特集 戦前の地図・戦後の地図、38p.
- 4) 陸測第五十期会編(1990)：『想—陸測第五十期生徒之記録』、441p.、私家版。
- 5) 長岡正利(1993)：陸地測量部外邦図作成の記録、地図、31(4)、12-25。
- 6) NHK取材班編(1993)：『ドキュメント太平洋戦争』全6巻。

(一部地図の掲載については清水靖夫氏の、米国国立公文書館の写真の調査は Kimoto Tech, Inc.・NJ のご尽力による)

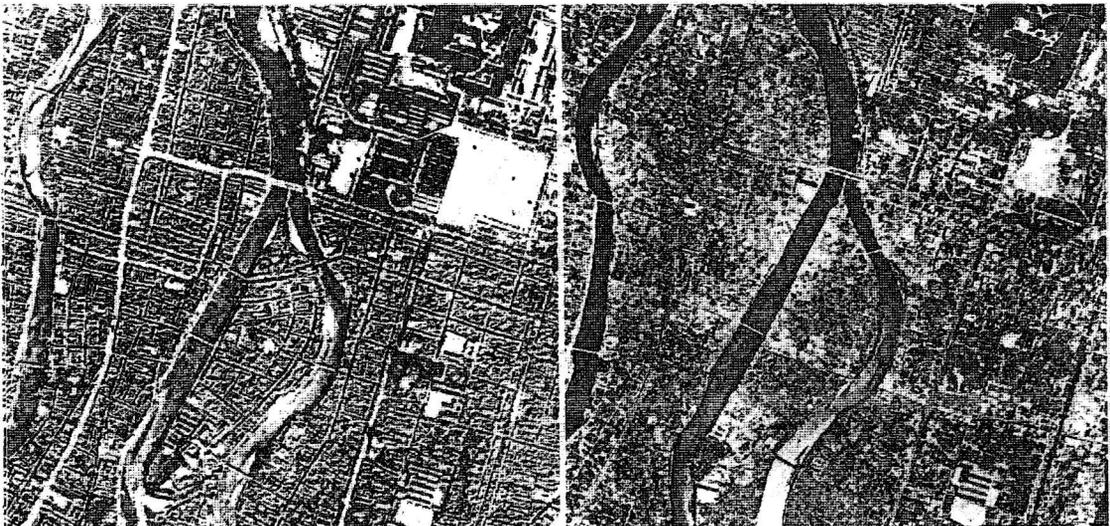
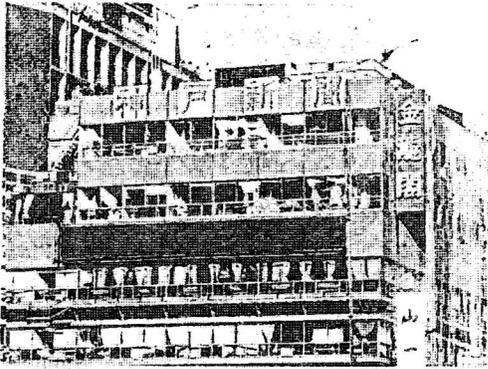


図6 日本陸軍と米軍の写真に見る戦前戦後の比較、広島市。

左は、日本陸軍昭和14年12月10日撮影、通りに面した密集民家が規則的な模様を見せる市街地、右上は広島城と第5師団の施設、右は、米軍22年4月14日撮影、太田川分流点南が爆心地、焦土化した地に僅かに家が建ち始めている。紙上での縮尺約2万分1。ともに財団法人地図センターで入手可。

神戸大震災レポート

神戸新聞社緊急システム構築を通じて



神戸新聞新聞会館(写真:神戸新聞社殿提供)

(はじめに)

「ゴゴー」「ドッスン」という音で体が大きく揺れ目が覚めた。「地震だ」と思うと共に跳ね起き「大丈夫か」と子供たちに声をかけた。全くの暗闇の中、懐中電灯を探し出しラジオをつける。「神戸市を中心に大規模な地震発生」と、アナウンサーの興奮した声が聞こえた。これが、今回の私の「神戸新聞緊急システム構築作業」の始まりであった。

各社に状況を確認するために、公衆電話に何度も並び直し、神戸新聞社以外はほぼ大丈夫だと知る。神戸新聞社と連絡が取れない。テレビが何とか1局だけ見られる様になったのが午後。次々と被害の状況が写し出されている。「行くしかないか」背広に着替え、渋る妻を無理やり運転手に、とにかく三宮まで行くことにした。

三宮の新聞会館は、東側の窓ガラスは全て壊れ落ち無残な状態だったが、建っていた。

真っ暗な中、新聞社の人の先導で壁の崩れ落ちた階段を3階まで上がった。蠟燭を囲んで編集局の人達数人がおられた。佐藤編集局次長殿が私を見つけ、「システムは大丈夫か、とにかく電算室とLDPを見てほしい」と第一声。CPU室の天井が半分落ちかけ、耐震をしていないパイロット機器やMTロッカーが斜めに倒れたり大きく横にずれていた。LDPは意外と整然とそこに有った。

「当分は無理か」とやや諦めながら、とにかく西

(緊急システム構築ドキュメント)

- 1/17 阪神大震災発生 (5:46)
「神戸新聞地震対策本部」発足
→新聞社より10日で立ち上げ依頼あり
- 1/20 緊急第一次システム順次搬入開始
- 1/21 CE、SE現地到着 (約50名)
- 1/23 システム構築開始 (オンライン立ち上げ)
- 1/24 動作確認、システムテスト
- 1/25 緊急第一次システム顧客渡し
- 1/26 顧客運用訓練
- 1/27 緊急第一次システム本番稼動 (10日目)
・2ヶ面製作から順次移行開始
- 2/1 富士通関沢社長、秋草専務訪問
- 2/5 全ニュース面復活(カラー面も復活)
- 2/14 テイリースポーツ自社制作開始
- 3/6 全ての面が自社制作となる

神印刷センターにシステム部の林局次長殿に会いに行った。思いのほか広々としたセンターは騒然とした中にも、一種落ちついた雰囲気があり、てきぱきと色々な指令が飛んでいた。「さて、システムをどうしよう」「何日で立ち上げられるか」「電源はどのくらい必要か」「スペースはどうか」「回線数は」「空調の能力は」「CVCFをどうする」等々…ゼロからのスタートであった。

(K.U)

宇野 潔氏のこと

戦後50年は、阪神大震災で明けました。その後はオウム、円高、金融機関の倒産など話題に事欠きませんでした。後者群が覆立たい人災であったのに比べ、震災の方は胸塞かれると同時に人間の崇高さにも打たれ、戦後50年を支えたものを改めて思い知る心地がします。

15期同期会時の近況報告中のひとくさりを編集長は聞きのがしませんでした。

「この間は 娘と嫁さんで逃げてしもうてからに…。そんなエピソードがあったんなら書きましょう。」

数日後

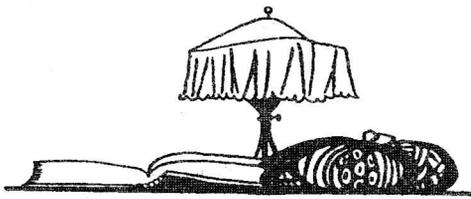
「やっぱり書かんなんけ？」

「わて、待っとるんやで。ええか？わてはく昔が懐かしい>たら、<仕方なく流されております>たら原稿のために時間を割きたくはないねん。<どう生きたか><どう生きようとしているか>がテーマねん。それにな。あんたはんが薦めたから、わては東京のボンボンにもうちの人もDESK POWER Cを買ってやったんやで。責任とりなはれ！」

かくして、宇野氏は原稿を速達で送るはめになった。猶、彼女はダイエーで購入したのであって、氏の懐とは何の関係もない。（「責任とって！」で男が理性を失うことは、この件でも証明された）

惨状を目のあたりにした彼が、前回の原稿募集の際に、このエピソードを書けなかった心情はご理解下さい。

あらためて、被災者の方々のご冥福と、復興をお祈り申し上げます。



15期 宇野 潔

本日（11月20日）、1冊の本が発売されました。「神戸新聞の100日－阪神大震災、地域ジャーナリズムの戦い」（プレジデント社；1600円）＝本社崩壊、コンピューターシステムのダウン。大災害の中で1300人の社員はいかに新聞を発行し続けたか＝です。興味のある方は、是非一読して下さい。

平成7年1月21日。快晴。

私はヘルメットを被り軍手をして、窓ガラスが散乱した歩道に立ち、三の宮の神戸新聞本社を見上げていた。

近くには、機材を運び出す為のクレーン車が2台、壁ぎりぎりに寄り、社屋突入の為の足場を確認していた。

<確認事項>

1. 突入時間は30分間とする事。
2. 最低必要とする物以外持ち出さない事。
3. 余震が来ればその場において動かない事。

私はコンピューターメーカーのSE（システムエンジニア）として、神戸新聞社の新聞製作システムを担当していた。震災当日（1月17日）に三宮の神戸新聞本社に駆けつけて以来、倒壊の危険の有る三宮本社から、西神印刷工場（神戸西区）で、コンピューターシステムの復旧作業に従事していた。

新聞の使命は「一日も欠かすことなく、読者に情報を伝える事」であり、それを支えるコンピューターシステムの壊滅的被害は、新聞社の存続をも危うくする。京都新聞社との提携により、神戸新聞は震災当日より数ページながらも新聞発行を続けていた。しかし京都新聞社での新聞発行には限界があり、一日も早いシステム復旧が、我々メーカーの使命となった。全国から必要機材を集めるにも限度があり、それらで震災前のシステム構成を確保するのは困難な状況であった。立ち入り禁止（倒壊の恐れ有り）に指定された三宮本社には、旧システムが「眠って」いる。

「使える物は全て運び出す。」との方針が出された。クレーンの使用許可を神戸市に取る手続きは、「神戸新聞社存亡の時」という理由で省略。決行は、まだ余震の不安が残る1月21日と決定した。しかし、自分の会社からは「危険な場所には一切近づかない事」の通達が出ている。一般社員を行かせることは出来ない。

「敢えて危険な場所に行くのだから、生命保険
だって出ないかも…」

「会社が禁止している事をしに行くのだから、
労災認定もむづかしいかな…」

「そこまでして、自分の会社でも無いのに、行
かなければならないの？」

突入前夜、妻（17期）との会話である。

天気は快晴だが気温は低く、寒さと緊張で震
えが止まらない。ビルに面した通りには救急車
やパトカーが頻繁に往来しており、否応なしに
緊張感が高まっていた。

10時突入開始。2階の窓へクレーン車から飛
び移る。懐中電灯を片手に、3階のコンピュー
ター室に急ぐ。剥げ落ちた瓦礫を踏みしめ、天
井が落ちかかったコンピューター室に到着。耐
震工事がされていない機器が横倒しになってい
たが、意外と整然としていた。搬出の指示をし
ながら

<今、余震が来たらどうしよう>

という思いか頭をかすめる。

あっという間の30分が過ぎ、無事2階の進入
地点に到着。クレーンに飛び移った時、正直言
って

<二度と行くのは止めよう>

と思った。

その後神戸新聞社の緊急コンピューターシ
ステムは、50名以上のSEを投入し、震災後10日
という異例の速さ（通常3ヶ月～半年間必要）
で立ち上がり、神戸新聞の発行を可能にした。

「そこまでして、自分の会社でもないのに
行かねばならないのか？」

「使命感」だと言えばカッコイイが…誰だっ
て私の立場にあれば、行ったのではないだろう
か。上司からは「絶対に行くな」と言われなが
らも…。

宣伝) 今回の私達の復旧作業に対し、神戸新
聞社から「感謝状」と記念品を、そして社内
では「システム本部長賞」を受賞しました。
命と引き換えでは安いような気もしますが、
それなりに充実した2ヶ月間であり、コンピ
ューターから震災後初めて紙面が出てきた時
の感動は、言葉に表せないものが有りました

あの悪夢のような大震災から10ヶ月が過ぎ、
三宮の神戸新聞社は跡形も無くなりました（更
地と化した）。JR三宮駅前にも震災前の賑わ
いが戻りつつあります。私も従来の作業形態に
戻り、東に西に出張の日々を過ごしています。

今回の震災では大勢の方が亡くなり、死ぬ思
いをした人々が多くおられる中、今回の投稿に
は心苦しいものがありました。編集長の「押し」
に負けた形で筆を取りました。

追伸) 私が三宮の神戸新聞社に突入した事実は、
会社の中では「無かった事」になっています。

以上



阪神・淡路大震災における神戸新聞社システムの復興

関西システム部・第三システム課

この度、F T Sが主体となった震災復興プロジェクトに対して、本部長賞を頂きました。そこで、その作業の中心となった関西システム部第三システム課長に現在の状況を交じえ、報告を頂きました。

あの悪夢のような大震災からはや10ヶ月が過ぎようとしています。

いまだ、4万8300戸の仮設住宅に被災者が住み、83ヶ所の公園や学校/区民センターに1,977人が避難生活を続けています。私が住む神戸市北区のマンションも未販売物件が全て被災者の賃貸住宅と化しました。J R三ノ宮駅界隈は、仮設テントの飲み屋ではあるものの、震災前の賑わいが戻りつつあります。

オウム騒動で忘れかけられた被災地神戸は、手塚治虫の「火の鳥」をシンボルマークと



建設中の神戸新聞社新社屋

した「フェニックス計画」が着実に進行しています。

我々がサポートする神戸新聞社殿の旧社屋（J R三ノ宮駅前）も完全に解体され跡形も有りません。又旧富士通神戸支店ビルも同じ運命をたどりしました。

しかし、三ノ宮から西へ2駅のJ R神戸駅近くのハーバーランドには、神戸新聞社の新社屋が急ピッチで建設が進められています。

又、震災以降神戸新聞社の拠点となった。西神印刷工場では、我々が構築したあの「緊急システム」が着実に成長し、「三ノ宮システム」以上の機能と能力を備え、日々「神戸新聞」と「デイリースポーツ」紙を読者に送り続けています。

震災後の神戸新聞社主催の慰労会では、富士通と共に、我がF T Sに対しても「感謝状」と記念

品を荒川社長より頂きました。その席で、荒川社長から「素早い復旧は新聞業界の驚異的であり、献身的な支援に心から感謝します。」とお言葉を頂き、関係した一人として感激したことを今でも思い出します。

神戸新聞西神戸印刷工場は、大阪から約2時間弱の距離にあり、最寄りの駅までは新聞社のマイクログラスで往復します。現在フィールドS Eは加藤班長以下3名で震災時の喧嘩は無いものの、システムのサポートに忙しい日々を過ごしています。

食事情は改善されたものの、仮設の食堂で食事を取り、相変わらずスーパーで買い込んできた食料がS E控え室に置いて有ります。

震災でのダメージは有ったものの、神戸新聞社は従来からの計画である「新社屋」への移転計画を着実に進めています。

当初の計画をわずか4ヶ月遅らしただけの、平成8年7月14日より、ハーバーランドの新社屋で紙面制作を開始し、9月22日には全面移行の計画となっています。

担当S Eはほっとしたのも束の間、この強引な計画に向かって今準備を始めています。一日も早い新社屋移転が神戸復興のシンボルとなるものと信じて今後も頑張ってサポートする所存です。

この「緊急システム」構築は、F T Sにおられた塚原部長を中心に、富士通情報出版システム統括部及び㈱タスク等の富士通新聞グループの総力を上げての対応が実を結んだものです。この対応に対し「本部長賞」を受賞出来たことは、我々の大きな誇りであり今後の新聞システム展開の励みにもなります。

賞金の15万円を受賞者一同有効に使い、当時の緊迫感を忘れず、やれば出来る（震災後、顧客からよく言われる）の精神で今後も活動します。

某部長の弁「震災がもう一度くれば、もっと上手くやるのに」、担当S E「いえいえ、1度だけでもう結構です……」。

以上

(これも宇野 潔氏 筆)